

# 自分らしい人生を！

千葉県立東葛飾中学校 二年 大熊 楓

家庭科の調理実習の時間、男子たちがこそこそ話している声が聞こえてきた。

「料理は女がやればいいじゃん。男には必要ねーよ笑」

ざわざわする教室の中、その声だけがいやに耳に残った。彼らと目が合ったが、洗い物や料理をする女子を横目に、話をやめることはなかった。

百四十六か国中、百二十五位。これは、今年六月、世界経済フォーラムが発表したランキングの、日本の順位である。二〇〇六年の発表開始以来、過去最低の順位、このランキングは、そう、「男女平等」の達成度合いを示すものである。

つまり、日本は世界の中でも「男女平等」でない、「女性差別が横行する国」である訳なのだが、実際のところどうだろう？女性の皆さん、男性から明らかな「差別」を受けたことはありますか？男性の皆さん、女性を男性より劣っていると思っているのでしょうか？もちろん、差別をされたり、差別意識を明らかに持っていたりする人も中にはいるだろうが、あまり多くはいないと思う。日本では女性だから教育が受けられない、幼くして結婚させられる、男性に不当な蔑視を受けるなどわかりやすい差別は稀だが、「男は力で家を守るべき」「女は男の一步後ろを歩き子を育てる良妻賢母であるべき」という価値観が潜在的に、しかし根強く残っていることが問題なのだと思う。これは「女性差別」だけではなく、「男性差別」にもつながっている。

男は一家の大黒柱でなければいけない。男はデートのときにおごらなければいけない。男は泣いてはいけない、強くなければいけない。女性専用車はあっても男性専用車はない。男性が女性に対して暴力をしたり容姿をけなしたりすると大問題だが、女性が男性にこうしたことをしてもとがめられにくい…。こうしたことは男性差別の代表的な例である。私自身、テレビのバラエティ番組で、男性芸人さんに対しては、未だに「ブサイク」「デブ」「バカ」などと言うことが寛容なことに男性差別だと感じていた。しかし一方で、

泣いている男子に対して「ダサいな」と思ってしまっていた。勝手な自分の偏見に気づき、恥ずかしくなった。

力仕事や外での仕事と、家事や育児を男女で分担するというのは、ある意味とても合理的である。しかしそれをどの家族にも押しつけて、個人の意思や能力を無視したジェンダーバイアスにつながってしまうことは、多様性が叫ばれているこの社会であってはならないことだと思う。男も女も、その他さまざまな性をもつ人々も、性別に関する偏見に悩んでいる人は多い。性別、年齢、国籍などの垣根を越えて、お互いの大変さを理解していけば、社会のステレオタイプなんかにとらわれず、誰もが自分らしい生き方を選択できる社会になっていくと思うのだ。

「理解し合う」ためには、口に出して対話することが何より重要だ。

「女性は生理もあるし、家事・育児だって簡単なことじゃない」

「男性は四十年間働き続けることが当たり前。泣くな、弱音を吐くなと言われる」

皆が大変なのは当たり前。「自分の方が絶対大変！」とならず、「そっか。お互い大変なんだね。協力し合おうね。」と、自分以外の人の大変さを素直に受け入れる姿勢が大切だ。「同性だから理解できているはず」「異性だからわからないはず」そんな思い込みは言語道断。決めつけや思い込みは一度脇へ置いて、目の前にいるその人自身を知る努力をさあ、今日から始めてみようではないか。

最後に、私らしい、私自身の言葉でしめる。「男らしく」？「女らしく」？そんなの知ったこっちゃない。自分の人生、自分らしく生きてやる！